

●豊後国分寺の再検討 2

今回出土瓦を『新修国分寺の研究』掲載論文にある出土瓦のデータで再検討する。

比較する平城宮瓦は奈良文化財研究所のデータベース「全国遺跡報告総覧」の中にあり
<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/1518>

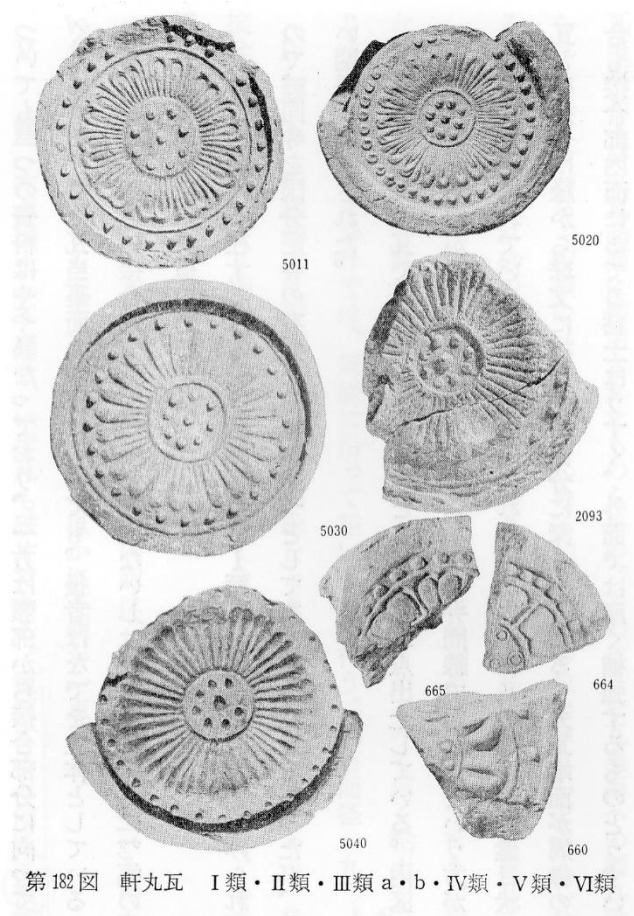
からダウンロードできる

『奈良市埋蔵文化財調査センター資料 1：平城京出土軒瓦形式一覧 I』奈良市教育委員会
1985

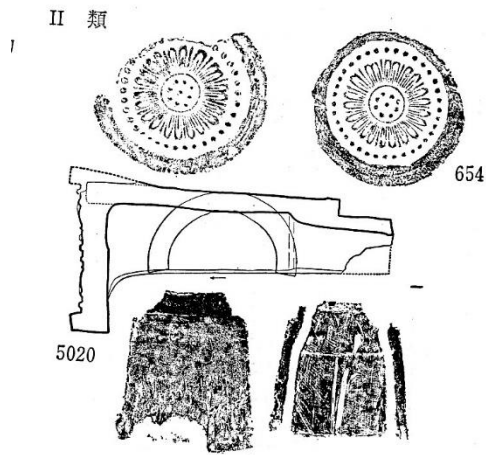
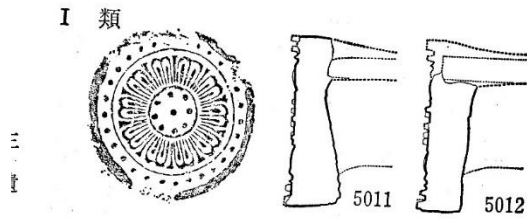
を参照する。

2：出土瓦の状況

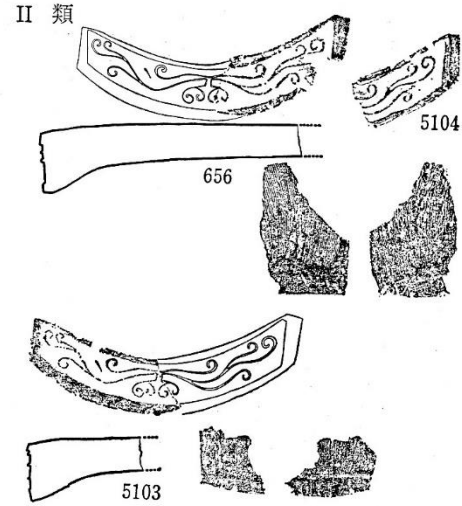
出土した軒丸瓦の種類は7種類。



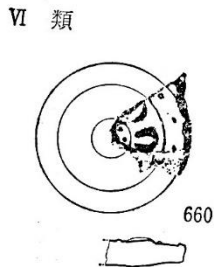
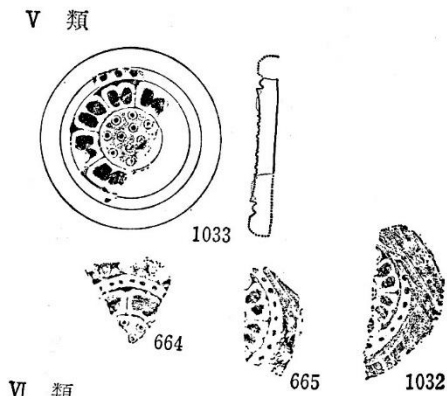
(「豊後国分寺出土軒丸瓦」を参照)



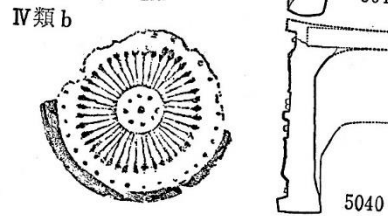
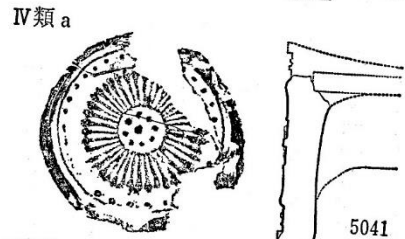
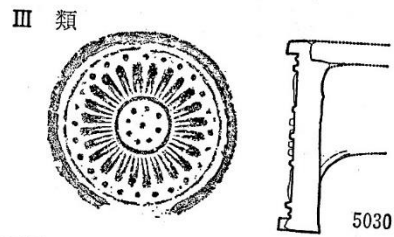
第 179 図 軒丸瓦拓影実測図 (1)



第 178 図 軒平瓦拓影実測図 (5)



第 181 図 軒丸瓦拓影実測図 (3)



第 180 図 軒丸瓦拓影実測図 (2)

(「豊後国分寺出土軒丸瓦拓影」を参照)。

またそれぞれの瓦がどの遺構からいくら出土したかは「豊後国分寺出土軒先瓦遺構別出土数」の表で確認できる。

| 種類 | 遺構 | 金堂跡(?) | 講堂跡(?) | 塔跡 | 回廊 | 溝 | 回廊以北の溝 | 瓦溜 | 計 |
|-----|-----|--------|--------|----|----|----|--------|----|-----|
| | | | | | | | | | |
| 軒平瓦 | I | a | 1 | 2 | | 1 | | 7 | 11 |
| | | b | | 1 | 1 | 1 | | 4 | 7 |
| | | c | 4 | 4 | 14 | 6 | 4 | 5 | 38 |
| II | | | 1 | 1 | | | 3 | 5 | |
| 軒丸瓦 | I | | | | | | | 2 | 2 |
| | II | 2 | 3 | 3 | 3 | 2 | 3 | 16 | 32 |
| | III | | | 3 | | 1 | | 8 | 12 |
| 瓦 | IV | a | 1 | 1 | | | 3 | 10 | 15 |
| | | b | | | | 1 | 6 | | 7 |
| | V | | 2 | | 3 | | 1 | | 6 |
| | VI | | | 1 | | | | | 1 |
| 計 | | 6 | 7 | 26 | 14 | 10 | 18 | 88 | 169 |

第1表 軒先瓦の遺構別出土数

(「豊後国分寺出土軒先瓦遺構別出土数」を参照)

A：8世紀中頃の平城宮系統の瓦

この表によると、軒丸瓦で最も数多く出土したのはII類である。

II類：複弁11葉蓮華文軒丸瓦。

そして数は少し少ないが、よく似た文様の

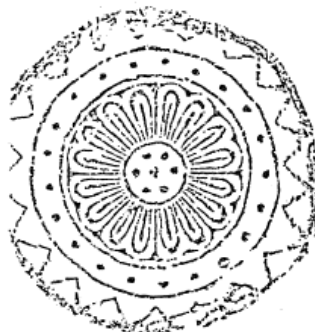
I類：複弁10葉蓮華文軒丸瓦。

これはII類と異なり、蓮弁の外側の珠文との間の境界線が描かれている。

これらとそっくりな瓦が平城宮瓦の6304Gである。

6304

G



(「平城宮瓦 6304G」を参照)

蓮弁の外側に鍵型文様がついていないこと以外はとても良く似たデザインである。

またこのⅡ類とよく似ているが花卉が単弁で花卉と花卉との間の子葉が省略されたのがⅢ類である。

以上のⅠ類Ⅱ類Ⅲ類は平城宮瓦の系統のものなので時代は8世紀中頃。

B：平安時代の菊花文

この平城京瓦系統に次いで出土数が多いのがⅣ類である。

Ⅳ類：菊花文軒丸瓦。

42 弁あり、花卉の外側の珠文の外に縁線を画するものを a 型、縁線が省略されたものを b 型としている。

菊花文は平安時代の瓦である。

C：最も古い素弁瓦

次に少量でているのが素弁瓦であるⅤ類。

Ⅴ類：複式素弁 8 葉蓮華文軒丸瓦。

これは素弁の花卉 2 枚を一組として 8 組デザインしたもの。花卉の数は 16 枚になる。

この報告書では花卉を二枚一組にしてその間に有るべき子葉を省略したものと規定し、まるで複弁瓦であるかのような記述をしているが、奈良時代中葉以後に作られたと考える国分寺に、もっと古い素弁瓦が出土したことを合理化しようとするものと言えよう。

この見慣れない形の素弁瓦は、素弁なので7世紀初頭か。

D：見慣れぬ単弁瓦

最後に、塔跡トレンチから 1 点だけ出土したのがⅥ類。

Ⅵ類：単弁 8 葉蓮華文軒丸瓦。

ふっくらとした 8 枚の蓮華花卉の真ん中に桃割れ状に溝をほって子葉を表した特異なデザイン。

単弁瓦なので7世紀中頃か？。

以上をまとめると

●瓦からみた寺院の変遷

1：創建期：7世紀初頭

- V類：複式素弁 8 葉蓮華文軒丸瓦。
2：葺き替え：7 世紀中頃
VI類：単弁 8 葉蓮華文軒丸瓦。
3：再建期：8 世紀中頃
I 類・II 類・III 類の平城宮瓦系統のもの。
4：葺き替え：平安時代
IV類：菊花文軒丸瓦

瓦からもこの寺院の創建が7世紀前半に属し、8世紀中頃に聖武詔で塔を七重塔にするなどの改造がなされた可能性を示している。

残された検討課題は国府との関係である。

2021 年 4 月 24 日

※補足

一つ書き忘れました。

豊後国分寺出土の瓦には一つ特徴があります。

それは太宰府の影響が皆無なこと。つまり、太宰府で最初につかわれた老司式単弁蓮華文軒丸瓦や次に政庁第II期で使われた鴻臚館式複弁蓮華文軒丸瓦がないのです。

同じ九州なのに、太宰府の影響がない。

これは何を意味しているのか。

この寺院が西偏で作られていることと合わせて考えると、豊後の有力豪族は九州王朝から半ば自立する立場を取っていたということの意味します。

では豊後の有力豪族とは誰か。

それは大分君。

大分君の代表者二人が、壬申の乱のときに、近江朝廷に反旗を翻した大海人皇子の軍に、一人は指揮官の一人として、一人は側近の護衛として参加したことが知られています。

興味深いつながりだと思います。

大分市教育委員会 1979 年刊『豊後国分寺跡』という報告書を読んでいます。『新修国分寺の研究』の豊後国分寺の項の元になった論文です。

このまとめでも、この遺跡から太宰府系の瓦が出てこないことが指摘されています。

まとめの「考察」の「6.おわりに」に次のように書かれています。

「3. 太宰府、鴻臚館系の瓦の分布がどこまでの範囲におよぶか。九州全域が同一系統の文様で統一されているのではないらしい。」と。

ただしこの報告書に付記された考古学者小田富士雄氏の論考「豊後国分寺跡出土の瓦当

資料」では、私が「平城宮系」としたⅠⅡⅢ類をみな、鴻臚館系複弁蓮華文軒丸瓦の簡略化された図柄と見えています。

このあたり、論者によって考古事実を素直にとらえようとする傾向と、従来の通説に強引に合わせようという傾向があることが見て取れます。

4月25日